

基本ルール カラ売りの仕組み

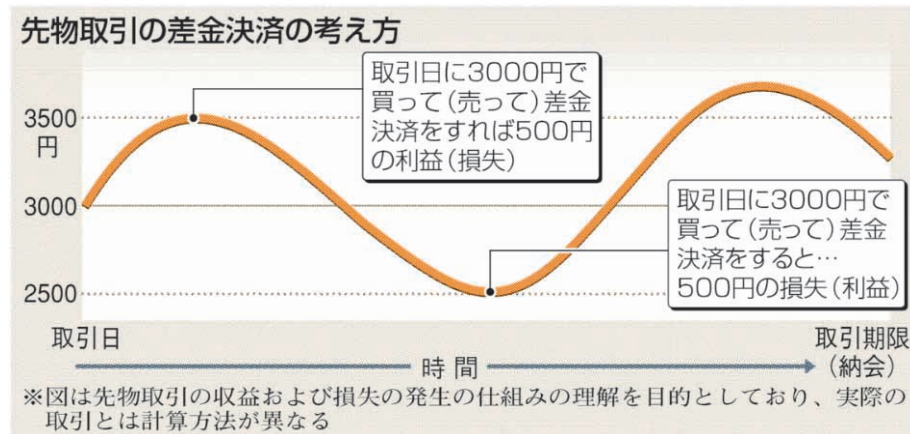
相場読み 値下がりでもうける

東京工業品取引所の金相場（先限＝2010年2月限）の14日終値は127当たり2885円と2月後半の3000円台から下がり気味に推移しています。出口の見えない金融危機に不安を覚えた投資資金がいわゆる「ラストリゾート（最後の楽園）」に向かっていったことは明白です。しかしその後は利益確定で売りに回ったのか、それとも株価の回復を眺めて落ち着き先をシフトしたのでしょうか。価格下落の理由にはいく通りかの説明がつけますが、正解は神のみぞ知る。唯一の真実は、東京金先物相場が2月20日前後に目先のピークをつけたということです。

一定期間後に強制終了

この場合、2月末に金を買った投資家は、残念ながら損を抱えてしまったこととなります。一方、同じタイミングで金市場に資金を投入しながら収益を上げている投資家もいるのです。

値下がりでもなぜ利益が得られるのか。多くの投資家が抱く当然の疑問です。答えは簡単。カラ売りをすればよいのです。そしてこのカラ売りというシステムこそ、先物取引の大きな特徴なのです。カラ売りとは文字通り「持っていな



いもの売る」こと。それを説明するためには、先物取引の基本ルールを知る必要があります。

それは先物取引には期限があること。取引を始めてから一定の時間が経過すると強制的に取引が終了してしまうのです。国内商品の場合、金、白金などの貴金属やトウモロコシ、大豆など農産物は最長1年。ガソリン、灯油などの石油製品は6カ月と定められています。

実際には、投資家は「〇年×月に受け渡しの期限を迎える」金やトウモロコシを買うこととなります。当然その間に相場は変動し、たとえば3000円で買った金が3500円に上昇することも、2500円に

下落することもあります。では最終期限に3500円になっていたらどうなるでしょう。その場合でも投資家は、当初買うと約束した3000円で金を買えるのです。それは同時に、相場が2500円になっていた場合でも3000円で買わなければならないことをも意味しています。

目的は価格差による利益

ただし先物取引では、必ずしも現物を受け取ったり渡したりする必要はありません。期限がくる前に、いつでも自分の判断で買ったものは売り、売ったものは買い戻せば取引を終了できるのです。これを差金決済といいます。

新・商品先物入門

③

日本商品先物振興協会

小島 栄一

先物市場の取引参加者の圧倒的多数は、現物のやり取りではなく、価格差によって生じる利益の獲得を一番に考えて取引をしています。

それでは、いま3000円している金が今後下がると考えている投資家がいいたらどうでしょうか。その場合は、迷わず「カラ売り」を仕掛けます。そして思惑通り値下がりしたら、受け渡しの期限が来る前に買い戻せば、3000円との値差が利益になるのです。もちろんその投資家はどこかから金を調達して来る必要はありません。

農産物市場に参加する飼料メーカーも同じです。彼らは実需家の立場から、この世に存在しない、1年後に収穫するトウモロコシを「いま」買います。これは角度を変えてみると「カラ買い」です。

先物市場には現物の調達・販売機能も備わっていますが、取引のほとんどは「カラ売り」と「カラ買い」なのです。